



自

転車の街 「宇都宮」から 世界へ

自転車競技の魅力

皆さんは「自転車競技」と聞いてどんなスポーツをイメージされるでしょうか。日本では、まず競輪をイメージされる方が非常に多いと思います。しかし、一言で自転車競技と言っても様々な種目が存在します。私が取り組んできたのは、その中で、ロードレースとシクロクロスという2つの種目です。

ロードレースは公道やサーキットで行われ、時に200km以上の距離を走り、順位を競います。1チーム5〜9人程で走り、チームのエースを勝たせるために様々な戦略を立てて戦いを繰り広げます。1人のエースに対し、その他の「アシスト」と呼ばれる選手は、風よけになったり、他のチームの選手を追ったりと、自分のリザルト（結



写真提供：Tatsuya.Sakamoto/STUDIO NOUTIS

小坂 光
宇都宮市保育課

果）を犠牲にしてエースのために走ります。選手の中には上りが得意な選手、ゴール前のダッシュが得意な選手、早いスピードを長時間維持するのが得意な選手など様々で、脚質と呼ばれるその能力を武器にレースを戦います。ツールドフランスに代表されるビッグレースは世界中で放映されているので、ご存知の方も多いでしょう。

一方で、シクロクロスは、一言で言うところ「自転車のクロスカントリー競技」です。舗装路や未舗装路を織り交ぜてつくられた1周2〜3kmのコースを決められた時間走り、順位を競います。元々ロード選手のみフリーズンのトレーニングとして始まった競技ということもあり、主に秋から冬にかけて行われます。競技時間は長くても1時間なので、選手は終始自身の持てるパワーとテクニックを駆使して全力で戦います。

【こさか ひかる】1988年長野県佐久市生まれ。高崎経済大学卒、2011年4月宇都宮市役所入庁。父親の影響で大学時代から本格的に自転車競技に取り組み、現在は宇都宮ブリッヂエンシクロクロスライダーとして活動中。2009、2010、2013シクロクロス世界選手権日本代表。2012年シクロクロス全日本選手権2位。

写真提供：Nobumichi.Komori 写真中央、赤いウェアが筆者

使用する機材は、一見ロードレーサーのようですが、オフロード用のタイヤが付いており、バイク自体も泥詰まりなどを防ぐ工夫がされています。

シクロクロス特有なのが、コース上には自転車に乗ったままでは通過できない箇所があるという点です。コース上には、意図的に階段や木の板を立てた障害物、深い砂地や泥区間などが設けられ、こうした箇所では、自転車を押ししたり担いだりして走ります。また、コース上にピットが設けられている点も悪路を走るシクロクロス特有のもので、マシントラブルやパンクの際は自転車を交換することもあります。サポートするスタッフとのチームワークも非常に重要です。

同じ自転車競技でも、ロードレースはチーム同士の戦略、そしてシクロクロスは個人の力、そのぶつかり合いがそれぞれの魅力でもあります。

自転車との出会い

私が自転車競技と出会ったきっかけは、今も現役で選手として走る父親の存在でした。物心がつく頃には毎週のように父が走るレースを家族で応援に行っていました。

しかし、そんな幼少期とは裏腹に、小学校に入学すると同時に毎日サッカーに明け暮れるようになり、いつの間にか私はサッカーを夢見ていました。それほど目立っ

泥区間では担いで走行

写真提供：Sonoko.Tanaka



今年2月、アメリカで開催された世界選手権に出場 写真提供：Sonoko.Tanaka

た成績を残すことはできませんでしたが、サッカーは高校3年生まで続けていました。再び自転車に興味を持ったきっかけは高校1年生の冬。サッカーの試合が無いからと、急ぎょシクロクロスのレースに参加することに。参加を決めた時にはとても楽しみで、それまで父が走る姿、優勝する姿を何度も見てきていたので、自分の中でイメージトレーニングはばっちりでした。そしてもちろん「出るからには勝ちたい！」と意気込んでレースに臨みました。

宇都宮ブリッツェンへの加入

後も挑戦を続け、翌シーズンにはトップカテゴリーにまで昇格を果たすことができました。自分が努力すれば努力しただけ成果を感じられる自転車競技の魅力に次第にとりつかれ、「大学にいったら自転車をやる」と心の中で決めていました。

大学に入るとシクロクロスのためのトレーニングとしてロードレースにも積極的に出るようになり、大学2年生の頃にはレースで入賞を繰り返すところまで力も付いてきました。

全日本選手権に出場



写真提供：Nobumichi.Komori

その年の秋に、レース会場で、僕の人生を変える出来事が起こりました。当時国内トップ選手として活躍されていた選手に声をかけられ、「来季宇都宮で新たに発足するチームに入らないか？」とオファーをもらったのです。

そのチームこそが現在私が所属している「宇都宮ブリッツェン」です。プロ選手になることなど考えたことも無かった私には本当に衝撃的な出来事で、入団するまで夜も眠れなくなるほどワクワクしていたことは、今でも忘れられません。

宇都宮ブリッツェンは、当時、日本初の地域密着型自転車プロロードレースチームとして「自転車街 宇都宮」に誕生しました。その背景には、宇都宮市が日本最大かつ最高峰のロードレースであるジャパンカップの開催地であること、また、それをきっかけに自転車を活用したまちづくりを展開していることなどがありました。

地域密着型チームということで、プロ選手としてのレース活動はもちろんですが、地域貢献として、県内の各地イベントへの参加やラジオ出演、スポーツや日常生活に

おける自転車の普及、交通安全教室の開催など様々な活動を行っています。

プロチームという恵まれた環境で徐々に力を付けることができ、夏は国内トップカテゴリーのロードレースや国際レースを走り、冬には2年連続でU23のシクロクロス、日本代表にも選ばれ、世界選手権へ出場、憧れの世界の舞台でそのレベルを経験することができました。ロードレースがメインのチームではありましたが、私自身の最大の目標は初めから変わらず「シクロクロスの全日本チャンピオンになること」でした。

人生の岐路

大学3〜4年生の時期は自転車選手としての活動に夢中でしたが、同時に進路を決めなければならぬという重要な時期でもありました。元々就職するつもりで大学に進学したものの、選手としての手応えを掴み始めていたので、プロ選手として活動していきたいという気持ちは日に日に強くなっていきました。

しかし、自転車競技自体、まだまだ日本ではマイナースポーツの域を抜け出していないこともあり、選手として成功を収めても将来の保障など何も無いのが現実で、選手を終えた後も長い人生が待っています。そう考えると就職という道も捨て切れません。大学4年時には、全日本選手権というシーズンの中でも最も重要なレースを広島

全日本選手権では2番目に高い表彰台に上った



写真提供：Nobumichi.Komori

で走った後、飛行機で帰って翌日面接試験を受けるなど、自分の思いとの葛藤もありましたが、とにかく何事にも全力で挑みました。本当に悩みに悩んだ結果、就職を選択。「仕事をこなしながらも日本のトップになることができる」と身を持って証明してくれた父の存在が私を決心させた決め手でした。そして幸いにも、私は、今や第二の故郷とも言える地である宇都宮市に就職することができました。

仕事とレース活動の両立

現在は宇都宮市役所職員として日々の業務をこなしながら選手としての活動を行っています。普段のトレーニングは基本的に仕事が終わった後、夜に行い、短時間で効率的なトレーニング方法を日々模索しています。もちろん業務が最優先なので、入庁当初は仕事に慣れることに精一杯という感じでしたが、自分なりに生活のリズムをつくり、今は仕事もレース活動もとても充実しています。

就職して2年目の冬、私は全日本選手権で1位と3秒差の2位でゴールし、初めて年齢制限の無いエリートカテゴリーでの世界選手権出場のチャンスを得ました。目標としている全日本チャンピオンのタイトルにはあと一歩届きませんでした。就職してから限られた時間の中で積み上げてきたトレーニングの成果を出すことができ、また、自分の選択した道が間違っていないなかつたと自信を持つことができました。アメリカで開催された世界選手権では、完走することすらできず、世界との差を痛感させられました。必ず再挑戦することを決意し今はトレーニングに励んでいます。

最後に

「プロ選手であろうが、フルタイムワーカーであろうが、レースがスタートしたその瞬間から、それぞれが置かれている立場、環境は関係なくなる」——私のロードレースの師匠から言われた言葉ですが、私はいつもそう思ってレースを走っています。100人以上が出走しても、たった1人強い者が勝つ、その勝負の中に「遠慮」という気持ちは存在してはいけません。目標に向かってブレることなく、全力で取り組み、その成果は必ず表れ、後悔することはありません。

今年こそは、応援して下さる方々や理解して下さっている職場の方々のためにも必ず「日本最速」の公務員になり、また世界に挑戦したいと思っています。

